教員名	杉野　勇　(SUGINO　Isamu)
所　属	文教育学部人間社会科学科応用社会学講座
学　位	社会学修士(1992, 東京大学)
職　名	講師
URL／E-mail	

◆研究キーワード

理論社会学　／　法社会学　／　社会調査　／　職場―家庭バランス

◆主要業績　　総数（4）件

・杉野勇, 2006, 「1936 年大統領選予測の実際――Literary Digest と Gallup 再訪――」, 『相関社会科学』, 15, pp. 55-69.
・SUGINO, Isamu, and MURAYAMA Masayuki, 2006, 'Employment Problems and Disputing Behavior in Japan,' Japan Labor Review, 3(1), pp. 51-67.
・杉野勇，2005, 「責任帰属の拡張的性質」, 『現代社会理論研究』, 19, pp. 73-84.

◆研究内容

この数年は、日本法社会学会初の大規模標本調査プロジェクトである民事紛争処理実態調査、インテンシヴ・インタヴューによる個別事例調査研究である司法についての当事者ニーズ研究、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」の一環である小田原パネル調査におけるワーク・ファミリー・フィット研究、そして、10 年ごとに行われている日本の社会学界の代表的な継続的全国調査の第 6 回目にあたる「社会階層と社会移動全国調査プロジェクト」(SSM2005)における女性のライフコース・ライフスタイル研究に従事している。2005 年度はそれに加えて、選択性の帰責をめぐる理論法社会学的研究、そして社会調査史上の画期的エピソードである。
" Literary Digest vs Gallup(1936)" についての真相の探究と社会調査論へのそのインプリケイションの研究なども行い、論文にまとめて発表をした。

◆教育内容

2005 年度は、学部の社会学の入門的講義では、コミュニティにおける規範、評判、インフォーマル・サンクション、社会資本といった基本的な社会学的視角、弱い紐帯の理論、予言の自己成就や準拠集団論、社会的ジレンマなどの代表的な社会学説・社会学理論を解説した。社会調査についてのメディア・リテラシーについても例示した。演習においては、「制度」をテーマとして、新制度派経済学や文化人類学など隣接諸科学との関連や異同についての学習を行った。行動経済学や合理的選択理論なども一部扱った。社会調査法の授業では、調査票の作成からデータ収集と計量分析までの全プロセスを年間を通じて実施した。2005 年度の大学院の演習では、社会構築主義、比較歴史社会学における理論の役割、カルチュラル・スタディーズ、教育社会学的な学校の参与観察、歴史社会学などの多様な文献を取り上げ、幅広い社会科学的な知見と批判的な思考スタイルを身につけられるよう努めた。

◆Reseach Pursuits

I am engaged in several survey research projects. The first one is the largest nationwide survey research in Sociology of Law concerning the civil "justiciable problem" in everyday life, and the second is the qualitative research on legal needs among ordinary people. These two researches are linked to each other, and I focuses on the employment problems. The third survey is the Odawara panel survey as part of Ochanomizu University's COE, in which I study the Work-Family fitness for middle aged women. The last is the 6th "Social Stratification and social Mobility survey". This is the most well-known longitudinal national survey in Japanese Sociology, and I work on the life course, life style of the female. To add to these, I published two studies in 2005; The one is the theoretical socio-legal study on the attribution of selectivity-responsibility. The other reveals the truth of the famous episode in social research history, that is the competition between Literary Digest and George Gallup in 1936.

◆Educational Pursuits

2005, undergraduate course:
Introduction to Sociology-- norm, reputation, informal sanction, social capital in Community. Media literacy or research literacy. The weak/strong ties, self-fulfilling prophecy, reference group, social dilemma, the empirical way to study social stratification and inequality, etc.
Social Research Method and Practice: Experiencing the whole process of social survey; Making questionnaire, data collection, and statistical analysis.
Seminar: Considering the "Institution" on the interface to the neo-institutional economics, or cultural anthropology. In part picking up behavioral economics, rational choice theory.
Graduate course:
Studies in Social Constructivism, Cultural Studies, Rational Choice Theory in Comparative-Historical Sociology, Historical Sociology, participant observation in middle school were examined.

◆共同研究例

・民事紛争実態調査
・社会階層と社会移動に関する調査研究
・職場役割と家庭役割のバランス（Work-Family Fit）についての調査研究

◆将来の研究計画・研究の展望

1）民事紛争処理についての実態調査の分析・研究（法の主題化、雇用問題）を 2008 年まで継続して行い、司法制度改革に対する提言や評価につなげたい。2）ワーク・ファミリーフィット研究の第二期パネル調査を実施し、第 1 期のデータ分析と共に縦断的分析を行う。3) 2005 年度実施の「第 6 回社会階層と社会移動全国調査」のデータ整備及び分析。ライフスタイル班に所属し、出来れば 2)の研究とリンクさせながら進めていく。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・Work-Family Conflict/Facilitation についての調査研究
・民事紛争処理（法の主題化／雇用問題）についての調査研究
・社会階層と不平等に関する調査研究

◆受験生等へのメッセージ

私たちは、しつけや教育などの「社会化」を経なければ、きちんとした「社会人」になれません。その意味で「規範」や「常識」を内化することはとても重要です。しかし同時に、そうした規範や常識の手前で立ち止まってそれを対象化してよく考えてみることも―特に青年期には―極めて重要です。グローバル化の中、自分達の手が直接届く範囲の割合はますます小さくなり、メディアなどによる情報や疑似体験に否が応にも巻込まれざるを得ない。その中で、経験的・実証的な証拠や事実に基づいて、かつ論理的・分析的に思考をするということの重要性は、いくら強調してもし過ぎることはありません。他方で、規範や常識、趣味嗜好の社会的フォーマットなどの「社会的なもの」とは、自分のアイデンティティと呼ばれるものを形成する要因でもあります。社会の理解と自己の理解が不即不離であることの淋しさと面白さを共に実感することが、とても大切だと考えています。